

小説 木森山水道

挿絵 あかつき

解放姫アンナマリー

若き王子が仕掛ける牝妻開発

立ち読み版

第一話	「私、アンナマリー＝レイドが悪の帝国を必ず打ち倒す！」	006
第二話	「帝国の王子であるこのジキルの妻になつてよ」「断る！」	032
第三話	「エッチな踊り子になりきつて、ぼくを楽しませて」	088
第四話	「娼婦研修さ。ローションプレイを覚えてもらうね」	130
第五話	「子作り授業の教材は、きみのそのカラダなんだよ」	171
第六話	「チンポから離れられなくなつてゐるってことでしょ」	215
最終話	「子作りセックスを始めようか、アンナマリー」「はいっ」	236

登場人物紹介

Characters



アンナマリー=レイド

レイド王国の第三位王位継承権者。まごうことなき王女の身分であるが、戦術・戦略ともに優れており、その実力をもって王国軍の将軍を務めている。また、個人の技量も高く、剣術においては国中を探しても並ぶ者がいない。



ランファン

【凶姫】の異名を持つ、ジキルの年上妻。無敗を誇る徒手空拳の武闘家であり、自分よりも劣る男たちを見下しているが、夫には身体も心も捧げている。

ジキル・ハイドンソン

レイド王国と敵対するハイドンソン帝国の若き王子。あどけなさの残る容姿ながら、情欲が強く、気に入った女を手に入れるためにはあらゆる手管を弄する。

第二話 「帝国の王子であるこのジキルの妻になつてよ」「断る！」

1

「アンナマリー＝レイド王女。帝国の王子であるこのジキルの妻になつてよ」

「断る！」

平然と言つたジキルに、アンナマリーは即答した。

デステア平原の戦いから数日が過ぎている。

敗れたアンナマリーと王国軍は、王子の帝国軍の拠点である森の砦に連行された。

快復するや謁見の間で王子と対面させられた王女は、あろうことか求婚されている。

「婚姻は親が決めるという慣習を破るわけにはいかない。ましてや、敵の妻になどつ」

「王女様、ぼくはね、美しくて気高くて強いきみに恋しているんだよ」

「知つたことか！ 平和な私の国に攻めてきた者の気持ちに應える義理などはないッ」

「捕虜全員の即時解放。これを約束しても？」

「むうっ……！」

アンナマリーは押し黙る。

慣習を守ることも、妻という形であれ敵の軍門にくだらなことも王族将軍として大事

だが、家臣の命には替えられない。

（私は敗軍の将。生きていても王国の害にしなければならない。民が赦さないからな。であれば、共に戦ってくれた皆を救うため、この身を捧げるべきなのだ）

承諾しようと思った刹那、こちらをじっと見ていた王子が目を輝かせた。

「流石は正義の王女様。乗り気みたいだね。よかった。あ、念のために言っておくけど、妻になったらあれを着てもらおうよ。ぼくの手作りの花嫁衣装なんだ」

王子が入り口を指さしたとき、丁度ランファンの姿が見えた。

深手にならない斬撃で倒しただけに、露出度の高い美女も全快しているのだろう。疲労も苦痛も感じさせない軽やかな歩行で近づいてくる女は、台車を押している。そこには、アンナマリーそっくりの木偶人形が立ててあった。

「あれを着ろというのか……!?!」

人形の衣装を見て絶句する王女將軍。

翼めいたマントや鳥を思わせる帝国系のデザインの鎧は全体的に勇壮で、手足のパーツは立派だ。しかし、胸元や腰回りが異常に露出しているのは看過できなかつた。

「もしも着たら、乳房も腹部も太腿も丸出しではないかっ。なんなのだ、秘部と尻でひらしているヴェールは！ あんなものが下着の代わりになるものかっ、微風が吹いただけでめくれあがり、大事な部分が見えてしまうぞ！」

「でも、きみの魅力を最大限引きだすよ。ぼく、着ている王女を早く見たい！」

「ふざけるな！ あのような、究極の破廉恥衣装など着るわけがない！ あんなものを働

める貴様の妻になるのもありえない！」

常識外れのふしだらな衣装は、自己犠牲的だが生真面目な王女の怒りを爆発させた。王女らしさとして教え込まれた慎みを踏みにじる王子の言動は、王族として敵にくだるわけにはいかないという矜持を強固にし、承諾から否定へと変心させている。

「じゃあ、捕虜はどうするの？ 処刑しちゃうっていい？ 生かしていても、維持費ばかりかかるからね」

「うっ……か、彼らは助けてくれ……結婚はできないが他のことならなんでもする……下働きでも、戦闘演習のアグレッサー役でも……」

誇りと優しさの間で板挟みの王女が泣きそうな顔になると、ジキルがニヤリと笑った。「なら、こういうのはどう？ ぼくの言うことに従うの。いいなりになつてくれる度に一定数の捕虜を解放してあげる。もちろん、結婚しろとかあれを着るとか、脱法行為的なこととは言わないよ。それは、ここにいる帝国の皆ときみに誓う」

居並ぶ帝国の騎士や兵士、合わせて二十人ほどの男たちを見回す王子。

「誓いを破れば、ぼくは味方ときみの信頼をなくす。それは統治者としても、きみに言うことを聞かせたい一人の男としても致命的だ。担保は十分だと思うけど、どう？」

「……わかった。吞ませてもらう」

アンナマリーが譲歩に乗ると、ジキルはにっこり微笑んだ。

「なら、早速始めようね。現在、捕虜の数は千二十四人。およそ千人だ。今日一日、きみ

がぼくの言うことを聞いてくれたら二百人を解放する。それでどうだい？」

「一日従うだけで、五分の一も逃がしてくれるというのか!？」

「ふふ、嬉しそうな顔。承諾してくれるんだね。それじゃ、その場に立って」

「承知した。その場で立つという、王子と向かいあえばよいのだな」

（なにをさせる気なのかわからないのは不安だが……たった一日で二百人も救えるのだ……

…なんでもしてみせるぞ）

心の中で固く誓ったとき、ふと思った。

（こうすると、王子の小ささがよくわかるな）

お互いに立って向かいあうと、ジキルの背丈は自分の胸元までしかない。

総司令官の王族らしい立派な鎧を纏う王子は、本気にならなくともなかなかの威厳を醸している。しかし、凜とした女の子にも見える美顔にはあどけなさが残っていて、どこか儂げ。抱きしめたら折れてしまいそうな危うさを感じる。

その王子が、

バチンッ！ バチンッ！

「な、なにをするのだジキル王子！」

「見ればわかるでしょ。留め金を外して王女の腰当を取っているんだよ」

こともなげに言い、腰当を放り投げる。

「動いたら契約違反だよ」

上目遣いで釘を刺すと、今度はスカートとショーツをずり下ろした。

「なっ!?!」

一気に大事な部分が涼しくなった。誰にも見せたことのない女の部分が、大勢の敵——筋骨逞しい鎧の男たちの瞳に映る。

「み、見るなァ!」

アンナマリーは羞恥で裏返った声で怒鳴り、慌てて両手のひらで秘園を隠す。

「オマンコ隠すのに忙しいだろうけど、足を片方ずつ上げて女王様。スカートもパンティーも脱ぎ脱ぎしようね。捕虜の解放のために言うことを聞く約束でしょ?」

呑気な声でジキルが命じる。彼の顔には、年齢不相応の下卑た笑みが浮かんでいた。

女王將軍は下唇を噛みしめる。恥辱で震える美脚を、ゆっくり片方ずつ上げ、ジキルが被服を取り去るのを手伝う。

「ありがとう。でも、両手は両脇にね。ぼくも皆も、アンナマリー様のオマンコを見たいんだ。意地悪しないで見せて」

「っ……わかった………辱めを受ける位で二百人の命が助かるのなら……!」

肉唇を隠していた両手は、スローモーションで両脇に移った。

「おおっ、姫將軍のオマンコっ! ヘアなしのパイパンかよ!」

「一見すると引き締まった下腹部も、よく見ると女らしく微妙にふっくらしてるぞ」
無遠慮な男たちは、目に焼きつけようとするかのように、熱烈に見てくる。

「きみたち、近くに来ていいよ。ぼくらを中心にした半径三メートルの範囲に、扇形に整列するんだ。いつもぼくのために働いてくれてるささやかなお礼さ。ぼくたちと勇敢に戦ったお姫様のオマンコを、一緒にじつくり見ようね」

オオオオオオオオオオオ!!!

広間にいた男たちは全員、即座に駆け寄ってきた。

「ぼくは誰よりも近くで見るよ」

ジキルは秘園の目と鼻の先に座り、穴の空くほど見詰めてくる。

（くうっ、なんという辱めだ……私はレイド王国の王女だというのに……これでは王族の面子は丸潰れではないか……）

羞恥で真っ赤に赤面するアンナマリーは、斜め下に向かって俯く。

「死にそうな位恥ずかしいって様子だな。可愛いじゃねえか」

「すごく強くて優秀な美女を嫌がらせながらオマンコを鑑賞するのは最高だよな」

大勢の敵が囁す中、ジキルが感嘆の溜め息を吐く。

「女の穴がお尻に近いタイプ……下つきなんだねえ。性器の周りの一段と生白い肌に染み一つないのが、息を呑むほど艶めかしいや……健康な女將軍だからだろうね。大陰唇は平たい子供のものじゃなく、まるで開く寸前の大きな蕾で、男を狂わせる膨らみぶりだ……へえ、王女將軍様の女の部分は、見てるだけで勃起して、すぐに種つけセックスしたくなる、見事な悩殺オマンコじゃない」

王子は姫將軍の花弁に触れそうになるまで鼻先を近づける。

「すんすん……汗の匂がちよつと強いかな。オマンコの周りはしっとり潤ってるし、結構蒸れていたんだね。空気が少しひんやりした広間で露出できて、意外に爽快だったりするんじゃない？」

「そんなわけがあるか！」

決めつける風に言うジキルを怒鳴りつけるアンナマリ。

「怖い怖い。怒り狂ってるって感じだね。でも、きみには契約という首輪が嵌められている。凄んでも平気だよ。だって、逆らえないとわかっているんだから」

ジキルは自分の腰当を外した。そういう構造らしい。脱ぐことなく腰回りの衣服を綺麗に取ると、アンナマリその後ろに回り、玉座へと伸びる絨毯であぐらをかく。

「な!? お、王子までそんなところを出して……いったいなにをしているのだ！」

「いいからいいから。それよりぼくにお尻を向けるんだ。その後は、腰を跨いでガニ股ポーズね。少し腰を下げてそのまま待機すること。両手は頭の後ろで組むんだよ」

命じられた王女は、屈辱に耐えながら注文通りの格好になる。

「くっ……こんな姿！」

生白く輝く乙女熟れ尻を突きだす下品なポーズになると、周囲から歓声が上がった。

「ヒューッ！ アソコ丸出し鎧王女のガニ股ポーズ、最高だな！」

「ウヘエ、すげえ興奮するな。王国の奴らはきつと見たことないぜ」

「真下にジキル王子の勃起デカチンポって構図が、また絶妙だぞ」

「男たちの言葉を聞いて胸中で呟く王女。」

（ちんぼというのは、おまんこと同じで性器の……ペニスの別称なのだろうが……）

「つい顎を引き、裸肉唇に向かってそびえる硬化男性器を見てしまう。」

（!?）なんと長くて大きいのだっ……しかも、骨が入っているように硬そうで……ああ、太い血管が浮き出て、ドクンドクン脈打っている……迫力があるではないか）

じろじろ見るべきものではないと頭ではわかるのだが、子を産む女のサガなのか、作り能力が優れていそうな男根に自然と目が吸い寄せられ、じっくり観察してしまう。

剥きだしの先割れ逆三角の先端は黒光りしてツルツルしていた。幹の部分はまるで剣の柄で、しかも年季が入っている風にドス黒い。だが、古さにつきまとうはずの朽ちた雰囲気はなく、使い込まれてますます性能が増した武器のような力強さを放っている。

（小さいころ……一緒に水浴びをしてくれた父上のものよりもずっと大きい……王子のペニスは大人以上なのか？）

状況も忘れて考えていると、ジキルがランファンを呼んだ。

「頼むよ」

「仰せのままに、ジキル様♪」

やってきたランファンは小瓶を持っていた。

鼻歌を歌いながら栓を開けると、ジキルの分身の先端に垂らす。

とろおおおお~~~~~

「あゝ、勃起チンポにはローションの冷たさが気持ちいいよ」

「ろーしよんだと？」

未知の言葉に小首を傾げるアンナマリー。

肉棒にかけられているのは、いやに粘りけの強い液体だった。無色透明で無臭の汁は、あつという間に肉棒の根本まで覆い尽くす。大人以上の巨大ペニスはテラテラと輝き、見ているだけで怯んでしまう凄みを放ちだした。

「セックスに使われる潤滑油だよ。すぐく肌に絡みついて、しかも蒸発しにくい。ぼくは前戯なしできみのオマンコと合体するからね。折角のアンナマリーオマンコを壊さないために使ったんだ」

「……っ!? 合体だと……まさか……」

「アンナマリー姫。ガニ股での待機ご苦労だったね。そのまま腰を下ろしてよ」

「そんなことをしたら、私の生殖器に王子のペニスが入ってしまうではないかっ」

「うん。自分のオマンコにぼくのチンポを根本まで挿しちゃって」

離れていても女唇を炙るほどの熱量を放つローションペニスが、狂ったように弾む。

「やるんだ。取引を忘れたのかい？ 捕虜のことは？」

「くっ……ジキル王子……貴様という男は」

姫將軍は屈辱で震える膝を懸命に曲げ、ゆっくり腰の位置を下ろしていく。

「お、入る、入るぞ！ 王子のデカチンに、お姫さんの下つきパイパンオマンコがつ」
「すげえ悔しそうな顔をしてるぞ」

「なのに、下品なガニ股で自分から敵のチンポを咥え込もうとして……最高だな」
ぐちゅっ……。

無防備な乙女の秘裂と悪漢の尖り肉塊が密着し、卑猥な粘着水音が響いた。

「とまっちゃだめだよ。少しずつでいいから、チンポの根本まで咥え込むんだ」

「わかってるっ。何度も言うな！」

アンナマリーは膝を曲げ、秘裂の位置をさらに下げる。

年齢相応に熟してはいるが、誰にも触れられたことのない秘唇は、ランスのような
亀頭の斜面に沿って、徐々に左右に開いていく。

（うっ……私の中の粘膜が、ペニスの先端の肉と擦れる）

幅の広い亀頭は秘裂にギリギリ収まる大きさで、息が詰まるほどの拡張感を憶えた。

しかし、痛苦はない。

亀頭粘膜を覆い尽くすローションが絶妙な触れ心地——ヌルヌルの接触感を生んでいて、
今まで経験したことのない甘い痺れが走る。

（なんなのだこの感覚は……こんなものは知らないぞ）

敵と性器の粘膜を重ねているのに、気色の悪さよりも妖しげな快感を憶えるのに戸惑っ
てしまう。物事を成し遂げたときの達成感とも、厳しい鍛錬をこなした後の爽快感とも違

う、魂を腐らせるような、けれど病みつきになってしまいそうな退廃的な魔悦は、王女として、將軍として歩んできた人生の中で初めて感じるものだった。

「くう……ううッ……圧迫が強くなった……？」

王女將軍は呻き、腰をとめる。膣内には、内臓が破れそうな危機感が居座っていた。

「ああそうか。ぼくのチンポの先が、きみの姫將軍処女膜に辿り着いたんだね」

ジキルは上に向かって小さく腰を振った。処女膜にツンツンという軽い衝撃が来る。

（私の処女膜……ジキルのペニスにつつかれている………つ）

理想の男性に捧げるべき部分が、下衆な王子の意志一つで貫かれるという最悪の状況に陥っているのを思い知らされ、心地よく鼓動していた心臓に、不快な拍動が混じる。

「破っていいかい？ すごく痛いけどさ」

「……フンッ、好きにすればいい……皆が助かるのであれば、いくらでも苦しもう」

自分も触れたことのない聖域が引き裂かれると思うと、流石に畏怖を感じるが、家臣のためなら耐えられる。

「本当に？ 敵の王子に処女膜を破られるなんて完全に傷物だ。嫁ぎ先は確実になくなるね。一生、汚らしい女として後ろ指をさされるに決まってる。ぼくから逃れることができても、お先真っ暗だよ」

「私のことなどいい……皆が無事に解放されるのなら……」

王国軍を敗走させた自分は今や、長く生きてはいけけない王女。大嫌いな王子の妻に

なるのは御免だが、皆の命を救えるのなら喜んで傷物になりたい心境だった。

「『ジキル様、処女膜だけはお赦してください。他のことはなんでもいたしますから』と言え、やめてもいいよ？ 代わりに、処女のままお尻の穴を開発させてもらうけど」

「……やらないならば私が破らせてやる。見る……これが私の覚悟だッ！」

アンナマリーは思い切り歯を食いしばった。

体重をかけて腰を落とし、ジキルの下腹部にお尻をぶつける。

ブツンツツッ！

「あぐあああツツツ!!!」

熱くて硬めで、意外に頼もしい感触の王子の股間にお尻をつきながら、眉間に苦痛の皺を寄せるアンナマリー。

ペニスに処女膜を貫かせるのは、身体がまっぶたつになったと思うほどの激痛だった。破瓜を遂げて数秒過ぎた今も焼けつくような擦過感が膣全体を覆っている。

「きみは痛くて苦しいだろうけど、ぼくは結構快感だった。ありがとう、お姫様」

彼女のお腹に両手を回すジキル。

「アンナマリーの処女膜、狭くて熱くてすごく気持ちよかったよ。気高すぎて、自分から処女膜を捧げちゃうお姫様のを貫通したと思うと、イクと思ったほど興奮したし」

ドクンツ……ドクンツ……。

(うう……中でペニスが……大きくなっている……)

膣の拡張感がじわじわ上がり、敵の肉棒で女壺を埋められている実感が増していく。

「うはー。処女臭いと思ってたら、アンナマリーのお姫様は本当に処女だったか」

「あーあー。ロイヤルバージンマンコ、王子のデカチンをがつつり啜え込んでるよ」

「王子のローション巨根に、一筋の破瓜の血が走ってるのが堪らないな」

「命乞いもしないで自分から膜を破らせるなんて、すげえ興奮するぜ」

間近で凝視している男たちが舌舐めずりする中、ジキルが彼らに呼びかける。

「心も身体並みに立派なアンナマリー姫様のオマンコは、すぐくキツキツだよ」

「王子っ、私の性器の具合など、どうして言うのだ！」

一気に顔が熱くなった王女は、慌てて首を巡らせてとめに入る。しかし遅かった。

オオオオオオオオオオ!!!

秘密の女体情報を得た男たちの雄叫びが木霊し、抗議はかき消されてしまう。

ジキルは得意げに口角を吊り上げ、さらに言いふらす。

「すべてのオマンコの常で、男の手よりも圧迫は弱いけどさ、鍛え抜いてるだけあって、その辺の女騎士よりもずっとチンポにクル。ローション塗れでヌルヌルの、熱めだけどまだほぐれていない処女の硬めのロストバージンほやほやオマンコ肉がさ、チンポの根本から先っぽにかけての隅々を、本当に隅々をだよ？ 嘔みつくように押しってくる感じを想像してご覧よ。イメージしただけで勃起するよね」



大人でも数十人がゆったり入れる大理石の浴槽は、薄い湯気をくゆらせている。姿が映り込むほど磨かれた同じ素材の床や壁にコケや汚れはなく、清潔そのもの。長らく放置されてきたとは思えない整いぶりだが、恐らくジキルがしたのである。

「うん。今日からは娼婦研修さ。ローションプレイを覚えてもらうね」

「お風呂なのですから、裸になるのは当たり前ですわ」

ジキルとランファンが、狼狽える王女を見てクスクス笑う。

「生まれたままの姿を、心を許したわけでもない男に見せるのが屈辱なだけだ……それに、完全に裸になるのでなく、私が王族將軍であることを示す装飾品はそのまま着けさせられている……敗北感をひしひしと感じるぞ。悪趣味なっ」

「ただの裸よりも、王族の証を残した方が楽しいものなんだよ。本来なら肌を見ることから叶わないはずの姫將軍様と、ふしだらなことをしている実感が強くなって、すごく興奮するんだ。それが男心ってものでね」

背丈が王女將軍の胸元位しかない■■の癖に、全裸のジキルは知った風に言う。

「アンナマリー様は娼婦の研修をお受けになるのですから、男心も学んでくださいね」

三十代の女盛りのように豊満で魅惑的な裸体を惜しげもなく曝すランファンが頷く。

「くっ……しかし、なぜ娼婦なのだ？」

「あれ、娼婦を馬鹿にしてるの？ 職業に貴賤ありって口？」

「そんなことは考えていない。娼婦であろうとも、人に貢献しているのであれば、それは

人の集まりである社会の安寧と発展に寄与していることと等号で結ばれるからな。私が言っているのは、どういう理由で娼婦の真似事をさせるのかということだ」

「そんなの、面白いからに決まってるじゃない」

「……ッ!? それだけなのか?」

「そうだよ。凛々しくて人望のあるアンナマリー姫様が、娼婦のテクを身につけるなんて背徳的でしょ。考えただけでゾクゾクするから、実行するんだ」

帝国軍の不満を和らげる。自分のことを信じさせる。今までの性行為には、必ずなにかしらの意図が付随している。これまで自分で考えたり、王子本人に告げられたりしたことを思いだしながら、アンナマリーは訊ねた。

「深慮はないというのか?」

「なんのこと? それよりも早く始めようよ」

とぼけているとは思えない仕草で首を傾げた王子は、ランファンが浴槽のそばに用意した椅子——ひっくり返した桶同然の、丸くて低い腰掛けにいたいけな尻を置く。

「これから二週間、娼婦研修を受けてもらうね。返す捕虜は五百人かどうか? これまでよりもレートが低いのは、捕虜を世話するために消える費用を考えてのことだよ」

「わかった。取引を受けよう」

王女將軍は神妙に頷く。捕虜のために莫大な費用がかかっているのを思えば、自分の利益の方が遥かに大きいといえる。統治のためではなく、私的に従わせる風なのは奇妙だが、

だからと言って値下げ交渉の類をする気にはならない。

「契約成立だね」

ジキルがにつこり微笑むと、ランファンは真面目腐った口調で切りだした。

「不肖、わたくしめがアンナマリー様に娼婦の技を伝授させていただきます。ただし、ジキル様がご指示されるときは、ジキル様のお言葉を優先してくださいませ」

「了解した」

「まずはローションを前半身に塗ることから始めましょう」

浴槽の縁に置かれていた、大きめの桶を引き寄せるランファン。沸かしたての風呂の湯を張った桶には、一回り小さい別の桶が浮いている。その中を満たしているローションは無色透明の粘液で、人肌位まで温まっていた。

「ジキル様、ご覧ください」

若妻武闘家は、手を伸ばせば届く至近で、遥かに歳下の夫と膝立ちで向きあった。彼と見詰めあいながら両手で桶の中身をかき混ぜ、手と粘液を馴染ませる。

とろおとおおとおお。

上げた両手のひらを胸元に当てて傾け、たつぷり掬い取っていた粘液を溢れさせた。

「ぐちゃぐちゃ……とろとろ……」

内側から外側へと手首で円を描き、開き気味の肉釣り鐘にローションを塗りたくる。

粘液の薄膜で覆われる雪色の乳肌は、ガラス張りの天井から注ぐ真っ白い光を反射して、

妖しくも美しい七色の輝きを帯び始めた。

「柔らかくてふかふかしたオッパイだから、ローションを塗っている間はへこんだり、指の間から溢れるようにはみだすけど、自分で揉んでいるようですごく淫靡だよ」

ローションで乳房を染めたランファンは鳩尾みぞおちに手のひらをすべらせ、割れていないが綺麗に引き締まったお腹に降りると、胸にしたのと同じ風に粘液を塗りつける。

「ココに塗る様子もお楽しみください♪」

ほぼ百八十度に太腿を広げるランファン。背中を傾け、女の秘園を見せつける。

「あんつ、ジキル様あ、ランファンオマンコと太腿をご覧ください……んふうう」

しっかりと見せながら、よく熟れた秘唇の周囲と太腿に粘液を塗り込んでいった。

「自分でオマンコにローションを塗る様子も最高だね。よかったよランファン」

「お粗末様でした」

両腕と両の下腿以外に粘液を塗りたくった女は、しつとりと微笑み、ジキルに向かって

おびきをする。彼女の肉厚淫唇は、クパクパと緩慢な開閉を行っていた。その秘裂からは、ローションよりもとろみの少ない甘酸っぱい汁が川のように垂れている。

「ろーしよんを身体に塗るだけなのに、どうして女の証を強調するのだ？ それに、ランファン殿のその有り様はどういうわけだ」

アンナマリーが首を傾げると、ジキルが肩をすくめた。

「娼婦は相手を喜ばせるのが仕事でしょ。男を喜ばせる場合は、射精させればいいっても

のではないんだよ。チンポキスみたいに、これからご奉仕しますって態度を示したり、自分のチャームポイントをスケベにアピールすることで、心も楽しませる。心が楽しければ、身体の牡悦が大きく深くなる。すべては最高の形で仕事をするためなんだ」

「わたくしのオマンコがこの有り様なのは、昂っている証ですわ。女の身体についてあまりご存じないアンナマリー様でも、女として興奮なさると同じ風になりますのよ」

ランファンの説明が終わると、王子はローション入りの桶へと顎をしゃくった。

「やり方は見ていたね。次はお姫様の番だよ。見よう見真似でいいから頑張って」

「む……わかった……」

ランファンに場所を譲られた王女は、彼女のいた場所に立ち膝になる。海綿を詰めた絹のマットに乗っているの、裸で膝をついても痛くはない。

「ご、ご覧ください……じ、じ、じキル様……っ」

羞恥と嫌悪で声を震わせつつ、粘液を大量に掬った両手のひらを胸元に持つてくる。

ぬるっ……たぶんっ……にゆるり、にゆるっ……。

自ら乳房をへこませ、波打たせ、弾ませながら、ゆつくりローションを塗りたくる。

「アンナマリー姫様の突きでるオッパイはハリが強いからね。手指で変形しても、ランファンよりも一瞬早く元に戻る。見るだけですごく興奮するよ」

王子は機嫌よさそうに鼻を鳴らし、食い入るように見てくる。

(この調子で続けてよさそうだな……それにしても)

揉むように乳房をひしゃげさせていると、仄甘い愉悅が走る。

乳房全体が微熱を持ち、鼓動の速度が少しづつ上がっていく。

(妙な感覚だ……味方の前でジキルにしてやられ、恥知らずに喘いでしまったときに女性器に感じたものと似ていて、同じ位濃密だ……胸でも感じられるものなのか?)

王女は不可思議な感覚を無視しながら、腹部にローションを塗りつけ、そこが終わると、太腿の付け根と肉唇に手を伸ばした。

(つつう……なんなのだ、この感じは……さつきよりも……すごいぞ)

撫でる風に太腿の付け根に粘液を塗ると蠱惑的な快感が走り、背筋が粟立つ。

普段は決して触れない秘園と手のひらが擦れるのは格別だった。膣内がぼうつと熱を持ち、媚肉の一片一片が切なく疼き、心地よく意識が白む。

「アンナマリー様、それ位で十分では？」

「ハッ……あ、ああ……そうだな」

ランファンに言われて我に返る王女。いつの間にか没頭していたらしい。丸く尖った胴底付近は彼女の指摘通り、もう十分濡れていて、ローションで淫靡に輝いている。

「なんだか、手でオマンコを擦ると気持ちいいって初めてわかった女の子みたいだったけど、ひよつとして夢中になっていた？ 邪魔してすまなかつたね」

凶星を突かれてドキリとする王女。

「決してそんなことはないぞ……次はどうすればいいのだっ」

その通りなどと言えるわけもなく、慌てて取り繕う。

「へえ、積極的だね。そんなにぼくと、いやらしいことをしたかったんだ」

「ち、違うっ、そういう意味ではない……その……どうせしなければならぬのだから、早く終わらせようとしているだけだ、勘違いするんじゃない！」

「ふん……いいけどね。やらせてくれるのなら」

王子は愛妻に目配せした。寄ってきた彼女は膝立ちになり、正面から彼に抱きつく。

「私の身体で気持ちよくなってくださいませ♪」

肩幅の狭い胸板に、体重を込めて豊胸を押しつけ、身体を上下動させる。

「よいしょっ……よいしょっ……お加減はいかがですか、ジキル様あ」

「ふふ、とてもいいよ」

両腕からはみだすほど大きいローション爆乳で磨かれる王子が、溜め息を吐く。

「温かくてヌルヌルで柔らかい爆乳オッパイにこうされると、ぼくの身体の大部分が包まれて堪らないよ。その状態で上下に擦れると、身体全体が痺れて気持ちいい。しかもしてくれるのが、ずっと年上の妻だもの。チンポがますます硬くなっちゃう」

「ああ、よかったですわあ。もっと気持ちよくなってくださいませ♪」

時々、心地よさそうにぶるりと震えながら、強く身体を擦りつけるランファン。

「王女は背中とチンポを頼むね。後ろからぼくに抱きついて、オッパイを背中にグイグイ押しつけながら、手コキをするんだ」

「てこぎ？　なんだそれは」

「チンポを手でくるんで扱くんだよ。ランファンは、ぼくの指を壺洗いね」

ランファンは王子から離れ、彼の手のそばに直立した。

一方、王女は覆い被さる風に王子の背中に抱きつく。ランファンよりも微かに劣る程度でしかない巨乳は、■■■の細い両肩と背中の上半分を包み込んだ。

「あー、いい感じ。ランファンとは違うタイプの巨乳……鍛えた若い女性特有の、反発力抜群のパツパツオツパイは、やっぱり気持ちいいね……ローションのヌルヌルと、オツパイの温もりと、体重をかけて抱きしめられる密着感、それに王国軍の憧れの的の王女にさせてるって男の上品な優越感が渾然一体となって、チンポ勃起がとまらないよ」

小さく腰を揺らし、根本からビクビク震える充血剛直を振る王子。

「手コキもお願いするよ。先っぽを握るんだ。赤ちゃんと握手するように軽くね」

「ふむ……軽く握ればよいのだな？」

王女は壊れ物を扱う心地で、赤黒くてキノコみたいな尖りに手のひらを絡ませる。

（相変わらず熱くて硬い……これが私をいやらしく喘がせたり、苦しめたりするのだ……しかしどうして、場合によって痛苦だったり快感だったりするのだろうか……）

嫌悪や恨みを憶えるより先に疑問に思ったとき、新しい指示を出された。

「力を抜いて握ったまま手首を下げて。傘の広がったところまでね」

言われたことを意識して、亀頭の輪郭に沿って手のひらの内側をすべらせてみると、ラ

ンスのように尖った先端が指の間を割り、全貌を現していった。

「上手上手。すぐく気持ちよかった。今のをさ、ゆっくり撫でる感じで繰り返してよ。もう少し手指に力を入れてね」

「うむ……了解した」

初回よりもほんの少しだけ強めに先端を握り直し、指をすべらせる。

ぬちゅっ……にゅちゅり……ぬぶっ……ぬこっ……ぬこっ……。

亀頭を扱く音は、泥濘を歩くのに似ていた。牡肉塊が手のひらから現れたり消えたりするのを見ながら聞くと、奇妙な気持ちになってくる。

(胸がドキドキする……女性器が熱くなって変に疼くぞ……)

王女は今まで経験したことのない感覚に戸惑いながら、淫蕩奉仕を懸命に続ける。

「くうっ、堪らないねえ。レイド王国のお姫様将軍に手コキしてもらうなんて。チンポがどンドン熱くなつて、我慢できなくなっちゃうよ……ぼくの言う通り、よく注意してやってくれる手つきには愛情を感じちゃうし、そこがまたいい……はあ……はあ」

本当に気持ちよさそうに腰を震わせている王子は、耐えるように足を踏ん張らせた。

「おかしなことをいうなっ。ただ丁寧に行っているだけだ。愛情など爪の先ほどもこもっているものかッ。下劣な貴様など、私は大嫌いなのだ！」

「わたくしは、愛情を込めて壺洗いさせていただきますわア」

王子の目と鼻の先で足を肩幅に開いて立つランファンが、甘ったるく言った。

「うん、よろしく頼むね」

王子が片方の手を伸ばす。ランファンは天井を向く彼の手のひらを跨ぎ、唇よりもふつつくらし肉花卉で申しかつた。

「わたくしのはしたなく開いたヌルヌルオマンコの入り口に、どうぞお指を入れてくださいませ。ココはジキル様専用の牝壺ですわ」

王子の人差し指と中指は、優しく媚肉を割りながら、花卉の中に消えていく。

「ランファンのとろとろで熱いオマンコ肉、ぼくの指を締めつけてくれるよ」

歳上妻に上目遣いで微笑む王子は、バタ足する風に両指を動かし、腹の部分で膣内を優しくひっかく。

「ヒダの高いミミズ千匹オマンコが、ぼくの指に絡みついて、奥に引つ張ってくれる。指先は敏感だから、まるでチンポが引つ張られてるみたいに気持ちいいね」

彼に開発され尽くした牝ヒダをソフトかつ絶妙に刺激される女武闘家は、心地よさそうに裸身をくねらせ、甘ったるい喘ぎ声を響かせる。

「わたくしも、はあ……はあ……はあ……ジキル様に育てていただいた、貪欲敏感オマンコ肉がお指に押されて、ああ、引つ掻かれて、牝悦直撃状態ですよ」

ジキルの細い手首に両手でしがみつきながら、ランファンが喘ぐ。

「ああンンン……クリトリス、気持ちいい……」

左右に開いた陰裂の上部で、ジキルの親指がのろく這いずりだと、ランファンが一際

高い痴声を上げた。

（陰核を弄られるのは、それほど快感なのか？ はあ、はあ……）

ランファンの身体——特に顔と胸元は真っ赤に染まり、大量の汗粒が浮かんでいる。

その姿を見て、声を聞いているだけで、まるで彼女の牝悦が移ったかのように、アンナマリーの身体が火照り、じいんと痺れてくる。

「ハア……ハア、なっ、ランファンの乳首が勃起して、乳輪が膨らんでいるぞ!？」

ふと目にした、他人の身体の見知らぬ変化に驚く王女。

「女の人はね、エッチに興奮して獣的な本性が出てくると、オマンコが膨らんで開いたり閉じたりするだけじゃないんだ。オッパイが張って大きくなったり、先っぽがそんな風になったりするんだよ……アンナマリー姫様もそうだよ。だって、ぼくの背中に当たるオッパイのハリが強くなって、乳首がコリコリしてきたもの」

「……ッ!？」

手コキをやめて背中から胸を引き剥がすと、確かに硬く大きくなっていた。

「別に恥ずかしがることないよ。何回も一緒に遊んだチンポを扱いたり、ランファンが牝鳴きする様子を見てるんだもの。獣的に興奮……発情して当然。ごく自然な反応さ」

「は、発情!？ 私の身体がお前を子作り相手に選んだとでもいうのか!？ わ、わ、私は、皆を救うために仕方なく弄ばれているのだぞっ、でたらめを言うなあ」

ジキルのペニスを少しは意識し、ランファンの痴態に妙な気分——発情していたのを自

覚していただけに、凶星を突かれると、後ろめたさで声の上擦ってしまう。

「そう？　じゃあ勘違いか。発情までいなくなるとも、刺激されるだけでオッパイの先は充血するからね。ごめんごめん。じゃあ、続きをしてくれる？」

「む、棒読みで誠意のない謝罪だがまあいい……わかつてくれたのなら続ける……」

アンナマリーは亀頭撫でを再開する。丁寧が続けていると、先走り汁が溢れてきた。

「先っぽはもういいよ。今度は、竿の部分を扱いてくれるかい？　最初から早く強めにしているからね。先走りが溢れたり、チンポが暴れるようにビクンビクン脈動してるからわかるでしょ？　もう、射精したくて堪らないんだ。お姫様の手でイかせてね」

「私がいさせる……？　どこかに連れていけというのか？」

「イクというのは絶頂の俗語だよ。言い換えると、射精させてつてこと」

「私がお前を射精に導く!!　そんな……まるで娼婦のようではないか！」

「あんツ、これは娼婦研修。であれば、受講しているアンナマリー様は見習い娼婦といえます。見習いといえど娼婦は娼婦。ご自覚くださいませ……娼婦のお仕事は、殿方に気持ちよく、お射精していただき、身も心も癒やしてさしあげることですよ」

ソプラノ媚声を上擦らせてランファンも迫る。

（そうだ、今の私は娼婦……皆を助けるために、ジキルを射精させなければ）

「ではジキル、お前を射精させる……んっ……んっ」

肉棒に沿って利き手をすべらせ、しっかり竿を掴む王女。

「握る強さはこの位でいいのか？」

「うん、丁度いいよ。そのまま竿を素早く扱いて。傘の部分……カリをさ、指の内側で軽くひっかけくのを意識してみて。そうされるとすぐチンポにクルんだ」

「う……うむ……では始めるぞ」

王女將軍は胸中で指示を反芻しながら、敵を射精させるための手淫を行う。

「ふふ、チンポ気持ちいいよ。竿を強めに扱かれると同時に、カリが軽く引つ搔かれるこの感じ。下半身が痺れて最高だね……はあ……はあ」

（ジキルがこんな息を乱しているとは……そんなに快感なのか？）

ランファンとするときはともかく、自分とするときはいつも憎たらしいほど落ち着いている。王子が、露骨に息を乱し、声を震わせているのは驚きだった。

「その調子で続けてね、アンナマリー姫様……んっ……くうッ」

「あ、ああ……」

（なんだ……この心の感じ……私は嬉しがつている？）

ジキルを喘がせることにも、彼から行為を催促されることにも、妙な達成感を憶える。もつと感じさせてやりたいという慈愛が湧いてきて、彼への悪感情が消えていく。

（なんだというのだ……）

戸惑うアンナマリー。淫らな手淫を続けるほど、不可思議な感情が大きくなる。と、ランファンが歯噛みした。



「子作りセックスだよ。これから皆の前で、ぼくらの赤ちゃん作ろうつか」

「ああっ……はああああ……や、やっぱりするのか……こ、子作りセックスを……ッ」

「本番に入るから、行動だけでなく口調も演技して、妻らしい喋り方をしてくれる？」

蕩けかけた心に王子の声が染み込むのが心地よくて、つい従順になってしまう。アンナマリーは妻になりきり、命令されてもいない卑語を使い、女らしい口調で問う。

「やはりい、入れるの？ ジキルのオチンチン、私のオマンコに入れてしまうの？」

「うん。腰を振って、ぼくの分厚いカリでアンナマリーオマンコをひっかき回して、ランスみたいな先っぽで子宮口をズンズン突きまくって、きみをよがらせながら、陰囊が空になるまで子種満載の灼熱濃厚ザーメンを注ぐ。そういうの、好きだよね？」

「そ、それはア……だ、好きだけ——ああッ、で、でも、だめよお……私とジキルは敵同士じゃない……たちも見ているのだし……許されないわあ……」

「オマンコを燃えるように熱くしてる上に、ぼくのチンポがグチョ濡れになる位、スケベ汁をだらだら漏らしながら言っても説得力はないよ」

王子は軽く腰を振り、張り出したカリで浅瀬をもどかしく擦る。

「あうううっ、先っぽを浅く入れるのやめてよお……弾みでオマンコに入っちゃうっ……いけないことをしてしまうわあ……はあ……はあ……」

「言つてよアンナマリー。ぼくと子作りするって。命令だよ」

「ああ……めいれい……っ」

牝悦を膣の肉の隅々に刷り込まれている王女は我慢できなくなり、腰を振りだす。

「そ、め・い・れ・い。きみは逆らえる立場じゃないよね」

約一月の性行為を通じて王女の腰使いを読みきっている王子は、宣言なしに挿入を深めたがっている。い彼女の動きを巧みにかわし、浅瀬より先を絶対に刺激しない。

「はあっ、はあっ、子作りオマンコお……」

王女の心身に猛烈な勢いで欲求不満が蓄積し、心臓が狂ったように拍動する。

（し、仕方ないのだ……はあ、はあ、味方を助けるためなのだから……すまないっ、王国の民よ、家族の皆……私は今から、ジキルの妻になりきる……敵と子作りセックスの実演をするッ……はあっ、はあっ、また不倫をするっ）

普段の口調で胸中で謝り、本心から敵に抱かれる決心をすると、心が軽くなった。

（妙に心がラクに……だが代わりに、ああッ、欲しくて欲しくて堪らなくなつたぞっ）

膣の疼きが鮮明となり、早く満たされたい気持ちが一気に膨らんできた。

「あ……ああ……あああ、あなた、あなたっ……わ、私にして……っ」

「よく聞こえなかったよ。もう少し大きな声でお願い」

「あああっ……意地悪う……あなたって、どうしてそういうひとなのお……？」

王女は甘える仕草で首を巡らせると、泰然とするジキルに阿おもねるように言い、

「けれど、言うわ……だって、シてほしいもの、ああ、でもお、今の私は妻だからよ？
ほ、本心じゃないんだからね……はあっ、はあっ、あなたの妻のアンナマリーの気持ちで

あつて、レイド王国のアンナマリーの本音じゃないのよ……っ？！

肉悦を貪りたい気持ちと、風前の灯火の体面を守るさを滲ませ念を押す王女。

「わかつてるって。さ、言つてごらん」

「はい……あ、あなたあつ……はあつ、はあつ、わ、私に、あなたの逞しいお勃起オチンポを入れて、子作りオマンコしてくださいいいいっ……！！」

「祖国を裏切る、裏切り不倫セックスで、ぼくの赤ちゃんを孕みたい？」

「裏切り不倫セックスで、あなたの赤ちゃん孕みたいですっ……私に産ませてえ！」

（はあああああ……いい、言つた……言つてしまつたあつ……！！）

演技でも言うべきでない、屈服そのものの禁忌の言葉を口にして戦く王女。

（でも……ああ、でも、どうしてこんなに清々しいのだ……？）

初めての感覚に戸惑っていると、ジキルの亀頭が浅瀬を突破した。

「こんな感じの方が子作りは楽しそうでしょ？ 皆も真似するんだよ」

受講者を見回して冷静な声で告げた後、ジキルは一気に腰を押しつけてきた。

じゅぶぶぶぶぶううううう……！！

「ああああアア……！ ハアッ、ハアッ、孕ませオチンポ、奥まで来たあ……ッ！」

焦らされていた女壺の隅々をぎっちり埋められる満足感で、脳裏が真っ白になった。

肉棒の強烈な脈動で女壺が揺すぶられる度に鼻先で火花が散り、意識が甘く遠のく。

「アンナマリーは下つきだからね。普通だと挿入が浅くなるバックでも、十分根本まで入

る……とはいえ、これまでのやりとりで思い切り発情して、子宮がだいぶ降りているんだから、あんまり関係ないか」

馬の手綱を握る風に両手を掴み、猛然と腰を振る。

「あつ、あんつ、あんツ、は、激しいつ、あああ、オチンポぐりぐりくるううツ！」

突出したカリ首に密生蜜ヒダ全体が擦られ、尖る先端で子宮口を何度も叩かれる。意外に逞しい王子の膂力と体重がこもった力強い突きを、これまでの情事で開発されきったポルチオにピンポイントで受ける王女の全身に、無数の細かい媚汗が浮かぶ。

「ぼくのチンポを見るだけで発情モードに入つて、ぼくの声を聞いたり姿を見ただけでオマンコからお汁をだらだら垂らすドスケ妻だからね。愛撫の前戯なんか不要でしょ」

「あひいつ、ああつ、ジキルう、ああんつ……はあああつ、その通りなお、いきなり奥まで入れられてもお、オマンコに響いて気持ちいい、あんツ、牝悦感じるのおつ」

「ね？ ぼくもオマンコ擦れて気持ちいいよ。ぐらぐら煮立った鍋みたいな泥濘だもん。これまでぼくのチンポで何回も擦られたヒダの一本一本もさ、処女るときよりも随分高くなつてる。絡みついて、しかも奥に引つ張つてくれるのがいい。キュウキュウ締めつけてくれるから、チンポの先で割つて奥にくぐり込む度に、チンポが最高に痺れるしね」

牡悦でジキルの息が微かに乱れだす。

「はあ……ふう……ほんと、ドスケベなオマンコになったものだよ。敵のまっただ中でもぼくを気丈に睨みつける、清冽な姫將軍をここまで開発できて感無量だね」

体重と力を込めて何度も奥を突く。

「やあつ、そんなに強く、あうッ、はあつ、だめ、い、イクッ、あんんッ」

見えない力でグイッと押されたかのように、背中を仰け反らせるアンナマリィ。

「あはは、もう軽くイってくれたなんて、すごく可愛いよアンナマリィ。ほら、もう何回かイキなよ。イキ疲れた後、種つけしながら絶頂させてあげるから……!」

清廉な乙女將軍を淫乱に育成した達成感に酔いしれつつ、ペニスの麓を何度も王女淫唇に叩きつける。王子。

「ンアアッ、またイクッ、んひいいッ、またう、んおおおッ、ポルチオイクッ!」

抜き差しの水音が響く度に、そこかしこに愛液が飛び散っていた。神聖な学び舎にはセックスする二人の汗と体臭が立ち込めているが、顔をしかめる受講者はなく、男子も女子も固唾を呑んで見守っている。

「いいかいきみたち。いくら気持ちよくても、同じやり方ばかりだと飽きてしまうものだし、いくら好きあつていても、飽きてしまうとその感情も冷めてしまうものなんだ。だから、変化をつけることが大事になる。楽しい子作りと家庭円満の秘訣だよ」

王子は少し腰を引き、王女の膣のお腹側の一点を責め始めた。

「んおおおッ! じ、Gスポットお、Gスポットいいいいッ、Gスポイキするうう!」

膣口から数センチ奥のお腹側にあるGスポットは、クリトリスやポルチオに並ぶ女性の泣き所であり、娼婦研修の後半に重点的に開発された部分でもある。

ズリッ、ズリッと体重を込めてリズムカルに、肉キノコの尖りで突かれたり、熱くて硬い亀頭の側面で撫でられたり、カリで引つ搔かれたりする快楽は、膣の奥まで満たされないう寂寥感の分だけ際立って、ポルチオを責められる場合と甲乙つけ難い。刺激される度に意識がとびそうになり、目の前で真っ白い火花が散る。

「Gスポットいいっ、ポルチオもいいッ、オマンコ気持ちいい〜〜イイッッッ！」

生真面目な王女將軍の伶俐な美貌が、どんどん弛んでいく。

捕虜になるまでは決してしたことの無い、瞳のこぼれそうな蕩けた目をし、みつともなく舌を突きだし、涎を垂らし——戦で帝國軍を何人も倒し、最強の【凶姫】すら下した王女將軍とは思えない、肉棒に屈服中の女の顔で、よがり声を撒き散らす。

（すごいっ、すごいいいっ、い、イキっ放しだあ！ ああッ、落ちるのを許されず、落ちようとするとチンポに突き上げられて、ずっと高いところにいさせられているっ！）

突き上げられるまま、破廉恥に姫將軍巨乳を弾ませ、勃起乳首から汗粒を飛ばす。

「はああつ、はああつン、い、いいいッッッ！ イクのしあわせえつつ〜〜！」

叫ばずにはいられない衝動に従い、下品な吐露をする王女。

「アハハ！ イキすぎてタガが外れたね！ とんでもなく気の強いきみにそこまで言わせられて満足だつ、そろそろ子作り射精するよアンナマリー、構わないよね！」

「くださいっ、アンナマリーオマンコにい、子作り精液いっぱい注いでエっ！」

（あ、ああ、言ってしまった…：相手は私よりもずっと年下の■■■■で…：私を辱めた憎む

べき敵で、理想の相手とはとてもいえない下衆王子なのにつ……ああ、でもお……)
今までにないほど心が昂っていた。

それでいて妙に納得している。ジキルとの子供を儲けると思うと、穏やかな喜びと安堵を憶える。嫌悪はない。全身を包むのは目眩めぐるめく多幸福感のみ。レイドの王女として生きてきた人生でも、過去に彼に抱かれていたときにも現れたことのない心境だった。

「ん、くっ、ふう、後悔の言葉が出てこないね。それどころか、オマンコはチンポをさらに締めつける。絡むヒダは奥に引く張って、射精させたがっている。本当にぼくの子供を孕んで産みたいと思ってくれてるんだね？ 最高に嬉しいよ！」

王子の探るような声音が純粹な喜悦に変わっていった。

「ぼくとの赤ちゃん欲しいって、もつと叫んで！ ぼくの精液を子宮に送ってって！」

「は、はい、あなたあつ、私、あなたとの赤ちゃん欲しい！ あなたの精液をドクドク注いでえ！ 私を孕ませてえ！ あなたがドスケベにしてくれた私の王女將軍オマンコはあ、あなたの子種で孕ませてほしくてウズウズしていますう！ 裏切り不倫セックスで孕みたいのオ！」

乙女が恋を告白するように真摯に、絶頂したくて堪らない痴女が懇願するみたいに媚たつぷりに、王女が叫ぶ。

「演技に見えないよ……あのお姫様、本当にジキル様と子作りしてるみたいだ」

「敵のお姫様でさえあんなになるんだから、ジキル様のお言葉は全部正しいんだ」

「子作りのためには、女が誘惑することが大事なのね」

「いいなあジキル様……あのエッチな顔の女王様、すごく美人でとても強いのに」

「あんな、ダイヤよりも断然価値の高い女の人と子作りセックスできるなんて……」

「ジキル様が羨ましいよな……」

受講生の男子たちが、前屈みになりながら羨んでいる。

「あはは、■■■■ 相手とはいえ、彼らの垂涎の的を見せつけながら抱くのは気分がいいや……
：はあはあ、じゃあ、たっぷり見せびらかしたし、そろそろ子作り射精するよっ」

牝悦を感じすぎて激しく波打つ女王將軍のお腹を、強く抱きしめる■■■■王子。

愛液でべちゃべちゃのペニスの麓を淫唇に押しつけ、小刻みに腰を振る。

「はあっ、はあっ、ぼくとイキながら孕んでアンナマリー！ きみのオマンコはもう知り
尽くしてる、必ず一緒にイけるよ！ さあ、一番奥で射精してあげるね！」

蜜ヒダに先走り汁を撒き散らしていた肉棒が最高に膨らみ、膣を自分の形に変える。

「ああつ、あなたあ、あッ、あッ、あなたのオチンポの先が膨れてるわア！ 出るのね！
私を孕ませる精液を出すのね！ たっぷり出してえッくくく！ 全部受けとめて私イキま
すう、あなたとの赤ちゃんでお腹を大きくさせてえッくくくくくくくくくく！」

降りてきた子宮口を何度も押し上げ、射精のための快楽を貪っていた亀頭が、最奥と勢
いよく密着した瞬間に、爆発したように痙攣。直前まで出ていた先走り汁の代わりに、黄
ばんだ孕ませエキスが噴出する。

ドグウウウウウウウ〜！ ドビユルウウウウウウ〜！

「ああ、イクッ、裏切り子作りセックスで、アンナマリー・ポルチオイクッ、イクイクッ、オマンコイクッ、イグウツウウウウウウ〜！　ンンンンン!!!」

（出てるっ！ ジキルの子作り精液出てる！　いつもよりも熱くてっ、いつもよりも粘くてっ、いつもよりも大量に出てるっ！）

子宮ごと最奥の壁を揺すぶられると同時に、肉棒に絡みつくすべてのヒダを灼かれ、膣内がドツと重くなる。そのすべてが、病みつきになる幸福悦楽だった。

「しあわせえええっ！　子作り射精素敵よあなたあつつっつ〜！！!!!」

以前はあれだけ嫌悪していた性交が、今まで感じたことがない位に気持ちいい。

「はあっ、くうっ、んんッ！　ぼくも幸せだよアンナマリー！　きみに妊娠をせがまれて、叶えられたっ……はあ、はあ、ふあぁッ！　このときのためにきみを墮落させて、自分の体調管理を徹底した甲斐があった！　絶好のコンディションで交わられて、開発したきみのオマンコと蕩けあいながら、最高の精液を注ぎ込んで孕ませるッ！　狙ってやったことが成功したっ、こんなに嬉しいことはない！　いくらでも出そうだよオ！」

受講生の衆人環視の中、二人の結合部から溢れた精液と愛液の混ざり汁は、二人の内股を汚し、ベッドに染みていく。

「皆もこんな子作りセックスをするんだよ！」

ジキルの爽やかな叫びが、教室に響きわたるのであった。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ？



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル！

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう！
かなり過激なライトノベル！

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※「二次元ドリームノベルズ」は18歳未満の方は購入できません

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル！

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ！

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの公式サイトにて！

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



あなたのキモチイをお手伝い!

キルタイムのアダルトコミック誌!

業界唯一! エロラブ&エロコミック満載!!

電子書籍も配信中!



二次元 DREAM MAGAZINE DREAM MAGAZINE

魔法、催眠、性転換...不思議Hコミック誌!



大人気PCゲームのコミック多数連載!



COMIC UNREAL

ヒロインピンチDX

詳しくはKTCの公式サイトにて!

キルタイム

検索



書店、ダウンロードサイトなどで好評発売中!

※いずれも18歳未満の方は購入できません。